

戦後五十年をふり返って

日暮 淑

私達の人生の前半は、戦争の連続であった。昭和十二年、日支事変が始まり、参戦の教育を受け、『欲しがりません、勝つまでは。』を合言葉に戦争に参加していた。

食料事情

昭和十九年に千葉師範学校女子部に入学したが、学舎という言葉には程遠く食糧増産の為に働くことが多かった。稲毛や若松農場で甘藷や野菜作りに励んだ。

寄宿舎での食事は粗末なものである。嚙んでも、嚙んでも口の中にひろがってしまう麦飯、芋の葉や南瓜の葉柄を炒めて食べたこともあった。さつま芋などは御ちそうである。

農村では、増産に継ぐ増産が行なわれていたが、若者は勿論、中年男子も赤紙によって戦場へ征き、銃後は女と子供と老人だけで農業が守られていたのである。女でも牛馬を使い農作業に励んでいた。すべてが人力による作業である。夜は、遅くまで藁仕事等に励んで頑張っていた。開墾も各地で行なわれていた。豊住に十日川というのがあるが、戦争中に十日間で川を掘り、長沼を干拓して美田を造ったのである。

当時、農村では共同炊事が行われていた。個々の家庭では食事を作る手間を農作業に向け、不足しがちな食糧を大切にするためにも、五、六軒分をまとめて作るのである。

私達は、海上郡の方へ共同炊事の手伝いに行った。大きな農家に宿を借りての作業である。大きな平釜で一斗五升位の御飯を炊くのである。前の晩に仕込んで置いてかまどに火を燃すのだが、薪に燃えつくまでが大変であった。朝、四時半に起床して御飯を炊き、人数に応じて分け、取りに来てくれるのを待つのである。お昼はおにぎりにして野良に運んでもらった

事もあった。御飯が焦げてしまったりガンダになったり、その度に農家のお年寄りに助けていただいた事が忘れられない。その時失敗した焦げ御飯のおいしかった事も……。

服装

女学校に入学した時は、それでもセーラー服であった。憧れの服を着ることが出来たのも束の間、二年になる頃には、セーラーのあの四角い襟はもったいない、海軍さんの軍服にするのだと襟をはずして供出したのである。そのあとは白い布で丸襟をつけた。スカートははけず、母の着物をほどいてモンペを作り、緋や縞のモンペで登校した。女学生の服装に似つかないものであるが、戦争中ということで誰も不平は言わなかった。だんだんと物資がなくなり、母親の帯を解いて帯芯を手拭いの代りに使ったり、足袋等も自分で作ったりしたのである。

空襲

昭和十九年の後半頃から、そちこちが空襲を受けるようになった。レーテ島、サイパン、グアムの玉砕、撤退につぐ撤退で本土決戦が叫ばれるようになった。遂に東京への空襲が毎晩のように続けられる。千葉市上空をB29の銀翼が通過して行く。燈下管制のもとで電燈の光を覆っておいた。外に出て見ると敵機をサーチライトが照らしている。高射砲で迎え撃つのであるが、敵機は高射砲の上を飛行している。高射砲の弾丸は届かない。千葉から東京の空を見ては悔しい思いをした。

東京にお住まいのT子先生は宿直の夜、空襲警報（サイレン）が鳴ると『生徒さん、空襲ですよ。』

と、寄宿舎の長い廊下を防空壕に向かって走って行かれるのである。

『T子先生、また壕に入った。』

と笑って見送っていた私達であったが、自分自身が空襲に会ったとたん、地獄のような悲惨さに度肝を抜かれてしまい、T子先生のように死への恐怖におののき、空襲の度に防空壕に走った。

四月十三日、たまたま帰省して家に居た時、板橋方面が空襲された。B29の一機が火だるまになって豊住方面に飛行してきた。夜だったので、管制下で灯を消していたのに、昼よりももっと強烈な明るさで、誰もが我が家に落ちてくると錯覚する位のスピードで迫って来たのである。その途中、北辺田へエンジンの一つが落ちて、その飛行機は急に角度を変えて矢口（印旛郡栄町矢口）の水田に突きささったので、人家への被害は無かった。皆ホッとした。この辺は田舎なので空襲の被害はないものと信じていたのに……。命拾いをした。

それより前、二月十一日雪の降る寒い一日であった。私達は、学徒動員で師範の寄宿舎から蘇我の日立工場まで練習機の部品を作りに行っていた。その日は朝から艦載機の襲来で折角工場まで行ったのに、大願寺のある山の方へ避難しなければならなかった。防空頭巾をかぶって馴れない道を、どう走ったのか今では思い起こせない。でも機銃掃射をくぐり抜け皆何とか無事だったことは嬉しかった。夕方、漸く艦載機が去って寄宿舎にたどり着いたみんなは、くたくたになっていた。

忘れる事のできない運命の日。昭和二十年六月十日。当時女子部は学校工場となっていた。日立工場は、空襲の対象であるので空襲から工作機械を守るために学校に移して居た。昼夜を分たず三交代で飛行機の部品造りに懸命の努力をしていた。赤い練習機のエンジンの部品造りである。一ミリメートルの百分の一の誤差も許されない厳しい作業である。その時、オシャカという言葉を知った。私は荒削りの部分で旋盤を動かしていた。油の中での作業で鉄屑が手にささる。取りきれぬ物ではなかった。

朝、八時十五分、深夜作業が終わり、遅い朝食を済ませて床に着く者や洗濯をする者、まだ食堂に居た人もある。

その時、空襲警報がいきなり鳴り響き『房総半島を北上しつつあり。』とラジオの放送が告げると同時に、B29が頭上に飛来していた。私達は防空壕に走った。と或る先生が『消火用具も持たないで、壕に入る者がある

か。』と一喝された。慌てて持ち場にバケツや書類を取りに走った。予科生の一部は外泊し二組の人達は作業中だったので、いち早く避難していた。私達一組は作業が終わってホッとしていて避難が遅れたのであった。日毎の空襲に或種の馴れのような気分もあり、千葉は東京へ向う B29 の通り道と思っていた。しかし千葉が標的にされた。一度は防空壕まで行ったのに先生の一言で引返した為、友達は貴い命を落してしまった。さっきまで元気でいた友が無残な姿になってしまった。

私達消火班は、寄宿舎を回って講堂の裏まで行くと「シュルシュル、ヒュー。」という聞き馴れない音に、一瞬立ち止まりうずくまった班の人五人で抱き合って伏せた。音が止んだので壕へ急ごうと手を取り合って運動場にある壕を目指して走り出した。十米も走ったろうか、二度目の音、近いと思ってその場にまた身を伏せた。手に持っていたバケツは爆風に飛ばされたのか無かった。どの位時がたったのか、もうもうたる土煙が少しづつ治まるまでに何分かかったろうか、漸く辺りが明かるようになってきた。お互いの名を呼び合い命のある事を確認した。私達の班には一人の事故者もなかった。

付属小の図書館と講堂と寄宿舎の二階と大きな建物の三角洲のような所にいたお陰で無事だったのだ。後、五メートルも進んでいたら完全に建物の下であった。目の前の体育館が崩壊していたのだ。瓦礫の山であった。体育館の壊れた建物を乗り越えて運動場に出ると、点々と友達が倒れていた。さっきまで元気だった友が無惨な姿で横たわっていた。爆弾の破片で足が顔が手が……。一声もなくいった人、「痛い、痛い、お母さん。」とうめく人、ほんとうに地獄絵であった。

付属小の教室へバケツを取りに行き窓を開けていて、避難が間に合わなかったのである。運命としか言いようのない数分であった。壕にすべり込んだ人、壕を目の前にして爆弾の破片で足をえぐり取られた人、顔面を打ち砕かれた人、出血多量で息絶えた人。二階の搬出物を取りに階段を駆け登ろうと一番先に踏み出した人は即死。二番、三番の人は手や足、お尻に破片が当たり大怪我をしていたが、四番目の人は無傷であった。

負傷者を病院に運んだ人達の話を知ると、千葉駅周辺、師範の女子部と

千葉高女とその近辺から負傷者が次々と運び込まれて来てはいたが、何の処置もされずに廊下に溢れていたという。あまりの数の負傷者に手の施し方がなく、そのうえ病院では薬も包帯も乏しかったのである。

六月十日は日曜日であった。予科生も少なく付属小の子供達も登校しなかったのが、被害を最小限に食い止められたのだ。

空襲警報で学校へ駆けつけられる途中、機関区の辺りで爆風にたたきつけられて最期となった先生は、新婚ホヤホヤであった。若い奥様のお嘆きは筆舌には表わすことはできなかった。農夫のおじさんも牛を守って共に爆風にあおられて倒れ、生き絶えていた。京成の線路上を爆風で頬をえぐりとられ、そこから舌がとび出した兵隊さんが歩いていた姿を時々思い出す。

その後、油脂焼夷弾や機銃掃射で壊れた校舎に火がつき、必死の消火作業でも追いつかず、すべて灰になってしまった。学校に爆弾が落ちたのは交通の要地である機関区を狙ったのがそれで女子部に落ちたと言われていたが、そうではなく、千葉高女も女子部も学校工場なので、工場を壊滅させる為に、爆弾を投下したというごとを近年になって聞かされて、アメリカという国に驚かされた。

学校も寄宿舎もなくなって、男子部の猪鼻寮に転居し、通学できる人は家に帰ることができた。何日か母校の焼け跡の整理に通ったのであった。学校がないので、地方実習が行なわれた。この辺りは、現在の公津小学校に二十名位お世話になったが、学級担任としての心構えや野草を使つての食事の献立など、また、農作業も手伝った。当時の写真を見ると、男の先生は、紺の農作業用の半襦袢を着ていた人もいた。

七月七日

この日は、千葉市が空襲にあった日である。六月十日の空襲で怪我をし、千葉市の病院に入院加療中の友達が二人いた、他の人は、自宅の近くにある病院に移っていた。二人のうちの一人は、お姉さんだけの看病では心細いということで、級の人達が二人ずつ交代で看病に当たっていた。七月六日の夕方から私ともう一人が当番であった。夕食を済ませて管制下の暗い病

室でおしゃべりをしていると、空襲警報が鳴り、千葉市が再び爆撃を受けたのである。この日は、市の周辺から爆撃、焼夷弾が投下され、市の中心部にいた人達は逃げ場を失ってしまった。照明弾で辺りを明かるくしておいて爆弾を落とすので、ねらいに狂いはなく百発百中である。落される爆弾は数知れず、雨のように降ってくる焼夷弾をくぐり抜けながら逃げた。逃げ惑う後から爆弾や焼夷弾が追いかけてくるのである。

怪我をした友達をお姉さんが背負い、複雑骨折をしている手を友達が支え、私は荷物を持って病院の玄関まで行ったが、そこで私は三人と離れてしまった。

千葉市の地図のよくわからない私は、人の流れにつられて逃げた。どこをどう走ったか、気がついたら田んぼのある所にいた。防空頭巾と防空カバン。友達三人の姿を求めて歩き回ったが見当たらなかった。行く先々で焼夷弾に追われ、知っている人は一人もなく、心細くても立ち止まる事はできなかった。千葉市の人達は、家族連れや隣近所の人達で声を掛け合って歩いている。田ん圃の中にある民家も焼けているものが多く、熱くていられない。生け垣がメラメラと燃え上がってゆく。油脂焼夷弾なので火の粉を払っても落ちないのである。もう逃げる場所もない。歩く勇気もなく大勢の知らない人達と田ん圃の中で一夜を明かした。誰一人しゃべる人もなく、只、黙々と夜明けを待った。周り中、火の海で熱くどぶ川に身をうずめて火から身を守っていた。

夜明け頃から雨が降り出したので、火の勢いも衰え助かった。周りの人達からも安堵のため息がもれた。それから、男子部にいる友達を尋ねていく。途中、都川の土手や町の至る所に爆風にとばされた人、焼けただれた人、電柱につかまったままこと切れている人等、目を覆いたくなる様である。真夏の事、壊れた家の中に真新しいカヤが引き裂かれていたのが、今でも思い出される。一家で一時の平和を楽しんでいたであろうに……。

別れ別れになった友人も患者さんも姉さんも会う事が出来た。みんなが無事を喜び合った。三人は護国神社の壕にいたとの事。神社が焼けた時は「もうだめかと思った。」と言っていた。私はもう生きていないのではないかと心配してくれていた。皆、無事でほんとうによかった。運命とい

うことをしみじみと感じた。持っていた、物は、何もなく着ていたものは、ズブぬれなので友達に服を借り、帰りの自動車賃も借りて、四街道まで歩いてやっと自動車に乗り、七日の夕方家に帰り着いた。

父母は、千葉市が完全にやられ焼け野原になってしまったと聞き、私はもうだめなのではないかと思っていたと涙を流して喜んでくれた。その夜は、お風呂に入ってくさった様に眠った。

もう一人、六月十日の空襲で怪我をして入院していた友達は、破傷風に罹り、みんなでヘチマの水を探して飲ませたりして、少しずつ快方に向かってはいたが、まだ、動かせる状態ではなかった。お母さんだけが看病していたために、運び出せず、ベッドの上でそのまま息絶えていたという。『お母さんだけでも逃げて！逃げて妹や弟を頼む。』という娘の悲痛な叫びに、後ろ髪を引かれる思いで町の中を逃げ回ったお母さんの悔恨の涙が目に焼きついている。

千葉市の人達は、逃げ場を失って寒川の方へ逃がれた人が大勢いたそうである。逃げ迷う人達を容赦なく機銃掃射が見舞い、死体が折り重なっていたという事を後で聞かされた。私は、運が味方してくれたと、今でも感謝している。

この空襲で十名もの師や友、農夫のおじさんを奪われ、机に向かったの勉強もできず、只、学校の門をくぐり抜けて来ただけであったと思う。

あれから五十年、友の死を忘れることなく年会には皆で集まり、しのび合い語り続けてきた。そして法要を勤めてきた。

去年は五十回忌

今は、みんな現役を退き家庭の人となり、静かに余生を送っている。そして真夏の太陽を見ると

「ねむの花が咲けば夏休み、帰省できる。」と楽しみにしていた友達。そのねむの花の咲くのを待たずに散った若かりし友の御冥福を祈る日々である。

千葉市の三越デパートの前、バスの発着所辺りのグリーンベルトの一角に、祈念碑が建っている。『千葉県女子師範学校、同付属小学校、幼稚園、跡』と記され、地下の慰霊碑には亡き師友十人の名が刻まれている。